

言語理解における イメージ図式の影響

2004/1/31 21COE workshop

京都大学教育学研究科
補見研 COE研究員
中本敬子
E-mail: kenakamoto@nifty.com

概念メタファ

- 概念体系の大部分はメタファによって成立している。
 - メタファとはベース領域からターゲット領域への概念的な写像である。
 - 写像は、慣用的であり、概念体系の一部として固定化している。
- 慣用的概念メタファの体系は、無意識的で、自動的で、特別の努力を要しない。

概念メタファ仮説の 認知心理学的評価

- 言語学から提案された仮説だが、概念、思考、推論等の認知機能一般に関わる。
- しかし、言語表現の分析だけを行っている限り、**本質的に循環論** (Murphy, 1997; Ortony, 1988)。
- 心理実験によって検証する必要がある。

心理実験のための再定式化

- 無意識的、自動的 / 経験の理解に中心的
 - タスクや文脈によらず、あるターゲット領域を理解するときには、対応するベース領域が活性化される。
- 基礎的メタファとしての**方向づけメタファ**
 - ベース領域は**イメージ図式**、
 - ターゲット領域は量、温度、評価など。
- **イメージ図式**
 - 非命題的表象 空間的、運動的な表象の一種

心理実験に望まれること

- 言語理解・記憶以外の課題
 - 特定の言語表現の使用によらず、あるターゲット領域を想起したときにイメージ図式が利用されるか。
- メタファが成績の向上に有利に働くかの課題
 - イメージ図式の自動性の検証

Stroop様空間判断課題 (Seymour, 1974)

実験課題

- Stroop様空間位置判断課題
- ターゲット(漢字1字)の意味 イメージ図式上の方向性を判断に無関連な次元に設定し、空間判断への干渉/促進効果を検討する。
- ターゲット: 上下方向に即して言及される意味を表す漢字
 - 多ー少、温ー冷、良ー悪(実験対)
 - 高ー低(字義通り), ×-×(統制)

刺激と課題(1)

多
上

- 参照枠内の方向指示語(上/下)と、
- ターゲットの呈示位置(枠の上/下どちらか)が
- 一致しているかどうかを判断。
- ターゲットの意味(どんな漢字か)は、判断に無関連。

関連性要因(1)

- 位置判断関連次元と
(方向指示語; ターゲット呈示位置)
- 無関連次元の組み合わせで
(ターゲット漢字の方向性)
- 関連性要因を設定
- “同じ”: 順図式、逆図式
- “違う”: 図式 - 位置対応、図式 - 文字対応

刺激と課題(2)

多
上

- “同じ”

下
多
上
多

- “違う”

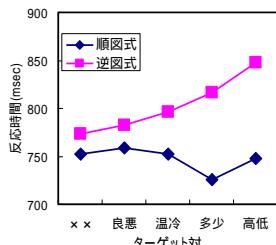
実験仮説

- ターゲットの意味処理にイメージ図式が自動的に利用されるなら、
 - 逆図式 … 干渉 (× - ×に比べ、RTが長くなる)
 - 順図式 … 促進 (RTが短くなる)
- イメージ図式が空間的表象なら、
 - 図式 - 位置対応 … 干渉 大
 - 図式 - 文字対応 … 干渉無し or 小

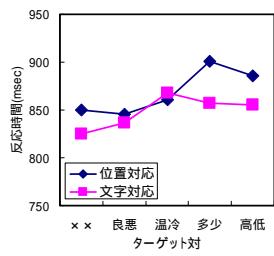
実験1

- ターゲット漢字が字義通りに解釈される場合
 - 空間判断に先立ち、文・語句を呈示
 - 例: 給料が多い、水が温かい
- 被験者 大学生32名

実験1 結果(1)

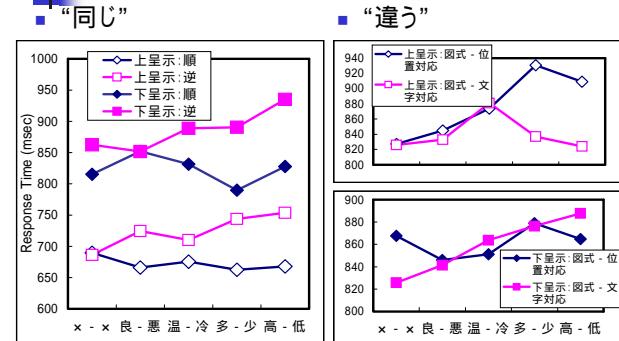


- 同じ
 - 交互作用 有意
 - 逆図式で干渉



- 違う
 - 関係性主効果 有意
 - 位置対応 > 文字対応

実験1 結果(2) ターゲット表示位置別



考察

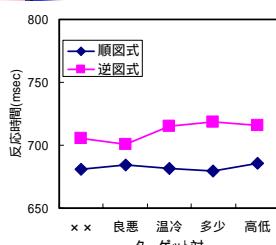
- 同じ: 逆図式条件で、X - Xと比較して、高 - 低、多 - 少、(温 - 冷)で有意な干渉。
■ イメージ図式の自動的な利用を示唆。
- 違う: 図式 - 位置対応で、文字対応に比べ、反応が遅延する傾向。
■ イメージ図式が空間的表象であることを示唆。
- 言語理解におけるイメージ図式の影響を部分的に支持。

実験2

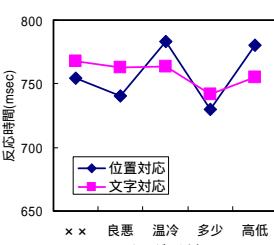
- ターゲット漢字が比喩的に解釈される場合
 - 空間判断に先立ち、文・語句を表示
 - 例: 気が多い、人柄が温かい
 - 文・語句の多くは慣用表現

■ 被験者 大学生32名

実験2 結果

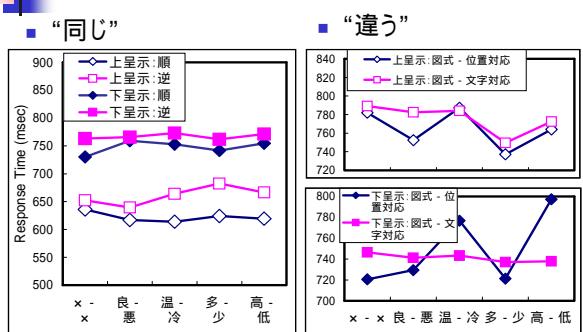


- 同じ
 - 交互作用なし
 - 関係性主効果のみ有意



- 違う
 - ターゲット対の主効果のみ有意
 - しかし効果に一貫性なし

実験2 結果(2) ターゲット表示位置別



考察

- 同じ:
 - ターゲットの持つ意味による干渉・促進効果なし。
 - イメージ図式の利用は認められない。
- 違う: 一貫した効果なし。
- 同じ単語(漢字)であっても、
どんな文脈で(どんな意味で)使用されるかにより、
イメージ図式の影響の有無は異なる。

総合考察(1)

- 実験1から、
 - 言語理解におけるイメージ図式の利用を部分的に支持。
- しかし、実験1および2から、
 - イメージ図式の自動性を完全には支持できない。
 - ターゲット漢字による干渉・促進の差異
 - 先行文による解釈の誘導で、干渉・促進が消失

総合考察(2)

- 実験1におけるターゲットによる差
 - イメージ図式の利用が見られた対
 - 多 - 少、(温 - 冷): 物理的属性
 - 見られなかった対
 - 良 - 悪 : 文化・社会的属性
- 上下の知覚・動作との共起関係の差
 - メタファーの動機づけとして共起関係を想定できるかどうかが異なる?

総合考察(3)

- 実験1と2の違い
 - 先行呈示文の性質
 - 共起関係の有無
 - 実験1 給料が多い モノが増えるとかさが高くなる。
 - 実験2 気が多い ??
 - 言い換え可能性
 - 実験1 給料が多い(多くなる) 給料が上がる。
 - 実験2 気が多い(多くなる) ? 気が上がる ? 気の量が上がる
 - どちらが原因かは分からない。
 - しかし、実験1での“違う”反応の結果と合わせると、共起関係の有無が重要と示唆される。

今後の課題

- 共起関係を統制・操作する必要
- イメージ図式に関連する身体運動を反応とした実験の実施。
- より多くのターゲット領域や、イメージ図式を対象とする必要。
- メタファー論の中での理論的位置づけ

- 本発表の一部は、下記論文として公刊されています。
 - 中本敬子 2000 上下の方向付けメタファーに関する実験的検討
ストループ的課題を用いて - . 心理学研究, 71, 408-414.
- その他、ご質問、ご批判等がございましたら、メール(kenakamoto@nifty.com)でご連絡くださいませ。